

# 第38回酪農海外現地実務研修会

2011年11月5日から15日まで、第38回酪農海外現地実務研修会としてニュージーランドとオーストラリアを訪問した。両国に共通する大きな特長は、政府からの補助金に頼らず、自由競争の中で酪農を営んでいるということである。そこで今回の研修では、政府機関への訪問は行わず、生産者団体や乳業者、酪農家といった現場を中心に研修を行った。データ等の詳細は報告書に譲るとして、ここでは酪農の生産現場で実際に見聞きし、感じたことをお伝えしたいと思う。

## ニュージーランドの酪農

オークランドに降り立った私達がまず目にするのは、一面の緑。まるで芝生のようなのだが、そうではなく牧草である。イギリスから来た入植者達が土地を切り拓き、牧草の種を播いたところ、今では民家の庭にまで芝生然として生え、花壇の作成にも困るほどであるとか。

そういった国土のほとんどを覆い尽くすかのような牧草地に立脚した、世界で最も競争力のある酪農を行っているのがニュージーランドである。

完全昼夜放牧と季節繁殖により、低コストに牧草から生産された生乳はフォンテラによって乳製品に加工され、95%が輸出される。そのため水分に価値はなく、乳価も乳脂肪と乳蛋白質重量の合算で支払われている。フォンテラは、国内での集乳シェアが9割を超え、世界の乳業会社の販売額ランキング第3位の、巨大酪農協である。

そのフォンテラからの紹介で、ワイカトのグレッ



グ&シャロン・アダムズの牧場を訪問した。牧場名は特になく、フォンテラの Supply No. 72373 という番号があるそうだ。牧場で応対してくれたアンドリュー・ウェリントンとホーリー・アダムスは、オーナーの義理の息子と実の娘である。この牧場は220ヘクタールあり、搾乳牛は750頭。彼らの予測では、このシーズンの出荷量は350,000KgMS (kilograms of milksolids)となる。ここでは、アンドリューとホーリーに加え、二人の常勤労働者が働いており、オーナーのグレッグも必要に応じて手を貸している。

説明を聞いている間にも、放牧されていた乳牛達が帰ってきて、ロータリーパーラーの前に行列を作っていた。アンドリューとホーリーは、この中の60頭が彼らの牛で、頭数を増やしていき1軒もてるようになったら、自分の牧場を買いたいと夢を語ってくれた。

このように、日本と違い牧場をもっていなくても、牛を置かせてもらい搾乳作業を行う。そしていつか独立するという酪農の営みもあるのだ。

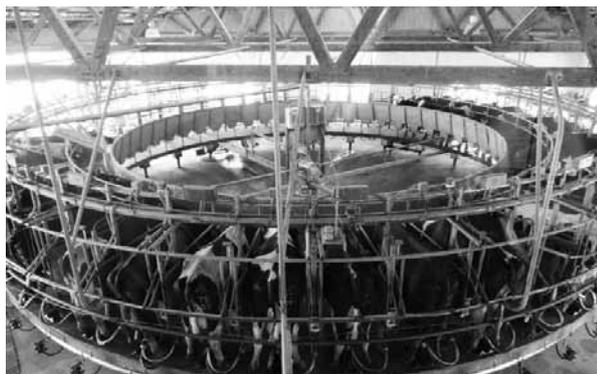


## オーストラリアの酪農

オーストラリアは、ニュージーランドに比べて比較的大きな市場を自国内にかかえており、飲用乳の需要も増加している。また、地域によって飲用乳地帯や加工・輸出がメインの地域というように分かれており、それぞれに事情が異なる。

我々が訪問したのは、酪農が最も盛んな加工乳地域であるヴィクトリア州にある、カルダーミードファームだ。カフェを併設しており、我々の訪問時にもにぎわっていた。そこで昼食をとった後、農場を案内してもらった。オーナーのマックス氏は、別の場所にも農場を持っており、この場所は6年半前に購入したそうだ。購入した理由は、一般の人はあまり酪農について知らないことから教育という目的と、メルボルン市内から75kmと比較的近い場所にあるため、なんらかの投資になるとの見込みからだそうだ。元々の農場は800haで1000頭、1頭あたりの乳量は年間8,500リットル。こちらの農場は180haで360頭、1頭あたりの乳量は年間8,000リットルとのこと。

オーストラリアでもニュージーランドと同様に、乳脂肪と乳蛋白に対して乳価が支払われる。コストに関しては、非常に敏感で、乳価から逆算して儲けを出すためにはエサ代をいくりにしないとイケないかを意識しているという。この牧場には搾乳作業の見学場所も用意されており、2階からロータリーパーラーを見下ろすことができた。我々以外にも多数の人々が訪れていた。



マックス氏は、オーストラリア最大の集乳シェアをほこる酪農協系乳業のマレーゴールバンに全量出荷している。何故マレーゴールバンに生乳を出荷しているのかとの質問に、マレーゴールバンはオーストラリアの全国市場の乳価を決定するような立場にあるということと、他の乳業メーカーはできるだけ安価に生乳を買おうとするが、自分が株主であるマレーゴールバンは見返りも全部自分に返ってくる、ということも挙げられていた。



## おわりに

ニュージーランドとオーストラリアは政府からの補助金がない点や、大規模経営で放牧主体、輸出がメインであるという点は共通している。しかし、細部を見ると、ニュージーランドの方がより極端に低コストで輸出向けに生産を行っている。牧草が減少する6～7月に国中で一斉に乾乳し、工場の操業もストップする。これはニュージーランド酪農が乳製品輸出主体だからこそできることである。

興味をひかれたのは、両国とも酪農家が出資・所有している乳業、いわゆる農協乳業が国内最大の集乳シェアを占めており、酪農家が自分たちの会社だという自覚を持っていたという点と、酪農家のコストに関する意識の高さが見受けられた点であろう。我が国とは規模もなにもかも違う両国ではあるが、酪農家の農協乳業との関わりとコスト感覚は、今後の我が国酪農を考える上で、大いに参考になるのではないだろうか。